

蘇軾詩注解（三十二）

山本和義
蔡毅
中裕史
中純子
原直枝
西岡淳

（南山読蘇会）

中国宋代の詩人蘇軾の以下の作品について注解を施す。括弧内の数字は東北大学中国文学研究室作成『蘇東坡詩作品表』による通し番号。

李端叔が牛叢が鴛鴦竹石の図を送るを謝するに次韻す（一九九五）
聡上人が寄せらるるに次韻す（一九九六）

王雄州が朝に還るときに留別するに次韻す（一九九七）

三月二十日、多葉の杏 盛んに開く（一九九八）

三月二十日、園を開く 三首 (一九九九、二〇〇一)

王雄州が侍其涇州を送るに次韻す (二〇〇二)

臨城道中の作 并びに引 (二〇〇三)

湯陰の市に過りて豌豆・大麦の粥を得て三兒子に示す (二〇〇五)

一九九五 (施三四―三四)

次韻李端叔謝送牛戩鴛鴦竹石圖

李端叔が牛戩が鴛鴦竹石の図を送るを謝するに次韻す

- 1 聞君談西戎 君が西戎を談ずるを聞いて
- 2 廢食忘早晚 食を廢して早晚を忘る
- 3 王師本不陳 王師は本と陳せず
- 4 賊壘何足割 賊壘何ぞ割るに足らん
- 5 守邊在得士 邊を守るは士を得るに在り
- 6 此語要而簡 此の語要にして而も簡なり
- 7 知君論將口 知る君が將を論ずる口
- 8 似予識畫眼 予が画を識る眼に似るを
- 9 笑指塵壁間 笑つて塵壁の間を指して
- 10 此是老牛戩 此れは是れ老牛戩なりと
- 11 平生師衛玠 平生衛玠を師とす

- 30 妙斲待輪扁
- 29 時來未可知
- 28 羣吠驚邑犬
- 27 新詩勿縱筆
- 26 幽處得小展
- 25 此畫聊付君
- 24 閉息默自煖
- 23 念當掃長物
- 22 涼暴困舒卷
- 21 家書空萬軸
- 20 已脫安用繭
- 19 如蟲得羽化
- 18 單車度殺漚
- 17 歸去亦何須
- 16 世俗固多舛
- 15 置之勿復道
- 14 未用市朝顯
- 13 愬君定何人
- 12 非意嘗理遣

非意も嘗て理をもつて遣る
 君を愬うは定めて何人ぞ
 未だ市朝に顕すを用いず
 之を置いて復た道うこと勿かれ
 世俗 固に舛うこと多し
 帰りに亦た何をか須いん
 單車もて殺・漚を度らん
 虫の羽化するを得たるが如く
 已に脱して安くんぞ繭を用いん
 家書 空しく万軸
 涼暴 舒卷に困ず
 念う 当に長物を掃いて
 息を閉じて黙して自ら煖むべしと
 此の画 聊か君に付す
 幽処に小しく展ぶるを得よ
 新詩 筆を縦にすること勿かれ
 群れて吠ゆ 邑犬を驚かさん
 時の來たらんこと未だ知る可からず
 妙に斲ること 輪扁を待て

元祐九年(一〇九四)、五十九歳の作。ときに知定州として定州に在った。

○李端叔 李之儀のこと。端叔はその字。時に蘇軾の幕下に在った。『蘇軾詩注解(一)』に収める作品番号一五九七の詩の注を参照。李端叔もとの詩は伝わらない。○牛骖 字は受禱。河内(河南省)の人。道士で花鳥を画くことに秀でていた。宋・劉道醇『宋朝名画評』卷三「花卉翎毛門」にその名がみえ、「尤も画を好み、其の長ずる所は翎毛なり」とある。

1 ○西戎 西方異民族の総称。ここでは、西北地方をおさえてしばしば宋を脅かした西夏をいう。2 ○糜食 食事をとらないこと。『列子』天瑞篇に、「杞の国に、人の天地崩墜して身寄する所亡からんことを憂えて寝食を廢する者有り」とある。3 ○王師一句 王師は天子の軍隊。『詩経』周頌「酌」に、「於鏘なる王師、遵て時の晦を養れ、時れ純いに熙かん」とある。陳は、陣をしくこと。『春秋穀梁伝』莊公八年に、「善き師は陳せず」とある。宋本、王本は陣につくる。4 ○賊壘 賊のとりで。白居易「裴晉公が女儿山にて石に刻める詩の後に題す 並びに序」(『白居易集箋校』卷三〇)に、「賊骨 化して土と為り、賊壘 犁かれて田と為る」とある。○剗 たいらげること。『旧唐書』馬燧伝に、「群兇を剗滅し、四方を砥平せん」とある。5 ○守辺一句 守辺は、辺境を守ること。得士は、有能の人を得ること。『史記』高祖本紀に、「安くにか猛士を得て四方を守らしめん」とある。また、同じく東方朔伝に、「士を得る者は彊く、士を失う者は亡ぶ」とある。6 ○要而簡 簡潔で要を得ていること。隋・薛道衡「老氏の碑」(『薛道衡集』)に、「其の辞は簡にして要、其の旨は深くして遠し」とある。7 ○論将 武将の優劣を論じること。『漢書』張馮汲鄭伝の賛に、「張釈之の守法、馮唐の論将、汲黯の正直、鄭當時の推士、是くの如くあらずんば亦た何を以てか名を成さん」とある。8 ○似予 宋本、王本は似我につくる。9 ○塵壁 埃にまみれた壁。白居易「流溝寺の古松に題す」詩(『白居易集箋校』卷一三)に、「松の老いたるを知らんと欲せば塵壁を看よ、死却せり 詩を題する幾許の人」とある。10 ○牛骖 詩題の注を参照。11 12 ○衛玠・非意二句 衛玠は、西晋の司空であつた衛瓘の孫。字は叔宝。容姿、人柄ともにすぐれた名士として知られた。『晉書』衛瓘伝に、「玠 嘗て人の及ばざる有るを以て情を以て恕す可く、非意に相干すも理を以て遺る可し、故に終身喜愠の容を見さず」とある。嘗は、『合注』では常に作る

がここは『晉書』の記載を踏まえ、施注に拠って嘗とする。非意は、不本意であること。「孔密州が五絶に和す」その五「堂後の白牡丹」(『蘇東坡詩集』第四冊二四三頁)の注も参照。一韓智翹の「聞書」に、「知ラザル事ヲヲラシツケテトカニヲトス事アレバ、我ハ更ニサワナイト云(ヒ)テ理ヲ以テヤリテヲフト云(ヒ)テ、ヲシツケラレテオルゾ」(『四河入海』十二の二)と記す。二句は、蘇軾が衛玠にならつて、不本意なことがあつても道理を念じてやりすごしてきたことをいう。13 14 ○ 愬君・未用二句 『論語』憲問篇に、子路を主君の季孫に讒言した公伯寮を、子服景伯が殺して曝しものにしましようかと孔子に申し出る条があり、「公伯寮 子路を季孫に讒言した公伯寮を、子服景伯が殺して曝しものにしましようかと孔子に申し出る条があり、「公伯寮 子路を季孫に讒言した公伯寮を、子服景伯が殺して曝しものにしましようかと孔子に申し出る条があり、吾れ力猶お能く諸れを市朝に肆さん」とある。これに對して、孔子は、道が行われるのも廢れるのも天命だと言つて、動こうとはしなかつた。二句は、李之儀を讒言した者が誰であつても殺して曝すことは無用であることをいう。15 ○ 勿復道 杜甫「興を遣る 二首」その一(『杜詩詳注』卷七)に、「声を吞んで復た道うこと勿れ、真宰 意 茫茫たり」とある。また柳宗元「法華寺に西亭を構う」詩(『柳河東集』卷四三)には、「之を置いて復た道うこと勿れ、且らく須臾の閑けきに寄せん」とある。16 ○ 多舛 舛は、意にそむくこと。思い通りにいかぬこと。王勃「滕王閣詩の序」(『王子安集』卷五)に、「嗟乎 時運 齊わず、命途 舛うこと多し」とある。17 ○ 歸去 蘇軾が職を辞して歸隱しようとする事。一韓智翹は、「坡(ノ)言(フ)ココロハ、哲宗元祐ノ後ニハ、又た熙豊党ヲ用フベキトテ、紹聖元年ト改メラルゾ、サル程ニ、サアラバ、我レナンドモ罪ニ逢(フ)ベキホドニ歸去(セ)ント思フゾ」という。ここはこの説に従う。18 ○ 單車 供の車を伴わないただ一台の車。『史記』魏公子伝に、兵権を奪われようとした魏の將軍晉鄙が信陵君に、「今 吾れ十萬の衆を擁して境上に屯す。國の重任なり。今 單車もて來たりて之に代わらんとするは如何ぞや」と言つたとある。○ 殺漚 殺山と漚池。殺山は函谷關の東に在る。漚池も洛陽の西に在つて、いづれも蘇軾が蜀へ歸るには經由する地にあたる。『史記』留侯世家に、左右の大臣が劉邦に洛陽(雒陽)を都にするよう勧め、「雒陽は東に成皋有り、西に穀阨有り、(黄)河に倍き、伊(水) 雒(水) に向かう。其れ固きこと亦た恃むに足らん」と奏上したとある。19 ○ 如虫・已脱二句 羽化は、さなぎが変態して羽がはえ、成虫になること。一韓智翹は、「言(フ)ココロハ、蚕

ノ羽化シテハ、繭ヲ用イザルガ如クニ、帰休シテ後ハ、世ノ憂患ノ纏縛ヲ脱シテ、縛セラルルコトヲ用イザルゾ」という。『蘇軾詩注解(三十)』に収める作品番号一九七九の詩の注も参照。21○家書 家蔵の書籍。韓愈「諸葛亮が随州に往きて書を読むを送る」詩(『韓昌黎集』卷八)に、「鄴侯 家に書多く、挿架すること三万軸」とある。22○涼暴 虫干し。漢・崔寔『四民月令』に、「七月七日、……経書及び衣裳を曝す」とある。宋本、王本、施注は暴を曝につくる。23○長物 無用な物。『世説新語』德行篇に、晉の王恭が、簞(たかむしろ)を無心してきた族父の王忱に一つしかない簞を送ったところ、これに驚いた王忱に、「丈人は恭を悉せず、恭の人と作り長物無し」と言ったとある。24○閉息一句 閉息は、呼吸をととのえること。蘇軾は、「養生訣 張安道に上る」(『蘇軾文集』卷七三)で閉息に注して、「閉息は最も是れ道家の要妙なり。先ず須らく目を閉じて慮を淨くし、妄想を掃滅すべし。心源をして湛然たらしめ、諸念をして起こらざらしめは、自ら息を出入すること調勻うるを覚ゆ」と記している。自煖は、ひとりでに身体が温まること。蘇軾は、「臘日 孤山に遊び、恵勤・恵思二僧を訪う」詩(『蘇東坡詩集』第二冊二〇〇頁)で、「紙窓 竹屋 深うして自ら暖かなり、褐を擁し坐睡して円蒲に依る」と詠じている。25○此画 牛馱の「鴛鴦竹石図」を指して言う。26○幽処 もの静かなところ。常建「破山寺の後禪院に題す」詩(『全唐詩』卷一四四)に、「竹逕 幽処に通じ、禪房 花木深し」とある。27○縦筆 思ったままを書くこと。28○群吠一句 『楚辞』九章の「懷沙」に、「邑犬の群れて吠ゆるは、怪しむ所を吠ゆるなり」とある。一韓智翹は、「世間ノ人ハ犬ノ如ク」ニシテ、ヒヤツヒヤツト吠(エ)テ、ナニカナキ出(ダ)シテ訴(ヘン)ト思(フ)ニト云(フ)ゾ」と言う。29○時来一句 時来は、好機が到来すること。杜甫「興を遣る 三首」その三(『杜詩詳注』卷七)に、「時来たりて材力を展ぶれば、先後 醜好無し」とある。未可知は、白居易「宝曆二年八月三十日夜 夢の後に作る」詩(『白居易集箋校』卷二四)に、「塵纓の忽ち解くるは誠に喜ぶに堪う、世網の重ねて来たるは未だ知る可からず」とある。30○妙斲一句 『莊子』天道篇に、輪扁(車大工の扁)が齊の桓公に車輪の削り方のコツを、「輪を斲るに、徐ろにすれば則ち甘にして固からず、疾やかにすれば則ち苦にして入らず。徐ろならず疾やかならざるは、之を手にて得て、心に応ず」と説いている。

あなたが西夏への備えを論じられるのを聞いてみると、食事をとることも時のたつのも忘れてしまいます。王の軍隊はもともと陣を布かぬもの、賊の砦など攻め落とす必要もありません。

辺境の守りはよき士を得ることが第一、この言葉は簡潔で要を得ています。大将の優劣を語るあなたのお話は、画の良し悪しを見きわめるわたしの眼力と同じだと知りました。埃まみれのお寺の壁を笑って指さして、ここに掛かっているのはあの牛馱の作だと認めたものです。

わたしは平生から衛玠を師として、不本意な目にあつても道理を念じてやり過ごしてきました。あなたを諷言したのはいったい誰でしょうか、とはいえ誅して市に曝すことなど無用です。放っておいて何もおっしゃいますな、この世に思い通りにならぬことは多いものです。

故郷に隠退する身に何が要りましょうか、一台の車で殺山と漣池を越えてまいります。羽化した虫のように、脱ぎ捨てた繭はもはや不要なのです。

家蔵の書画はあまりに多すぎて、虫干しするにも難儀するほどです。無用の品はきれいさっぱり処分して、閉息法で呼吸を整えて静かに体を内側から暖めるのがいいと思っています。この画はひとまずあなたに差し上げましょう、もの静かなところにさりげなく掛けておいてください。

詩を作る時には思った事を詠まないようになされよ、そのあたりの犬どもがうるさく吠えたてるでしょうか。いつまた時流がめぐってくるのかはわかりませんが、輪扁（のような目利き）が現れてあなたの才能を引き出してくれるのを待つとしましょう。

（担当 中 裕史）

一九九六（施三四―三五）

次韻聰上人見寄

聰上人が寄せらるるに次韻す

- 1 前身本同社
前身 本と同社
- 2 宿業獨臨邊
宿業 独り辺に臨む
- 3 一悟鏡空老
一たび 鏡空老なるを悟つて
- 4 始知圓澤賢
始めて円沢が賢なるを知る
- 5 歸心忘犢佩
帰心 犢を佩ぶるを忘る
- 6 生術寄羊鞭
生術 羊を鞭うつに寄せん
- 7 不似歐陽子
似るまじ 欧陽子が
- 8 空留六一泉
空しく六一泉を留むるには

元祐九年（一〇九四）五十九歳の作。

○聰上人 思聰のこと。聞復ともいう。杭州の僧侶。蘇軾「錢塘の僧思聰の孤山へ帰るを送る叙」（『蘇軾文集』卷一〇）に、「錢塘の僧思聰、七歳にして善く琴を弾じ、十二にして琴を捨てて書を学ぶ。書既に工みなり。十五にして、書を捨てて詩を学び、詩に奇語有り」とある。また、蘇軾「思聰が名の説」（同上）に、「法恵円師の小童彭九、年十一にして、琴を善くし、応対明了にして成人の如し。自ら言う、「未だ法名有らず」と。而して師を同じくするものは皆な思の字を聯ねたり、遂に与に思聰と名づく」とある。思聰の元の詩は伝わらない。

1〇前身一句 社は、仏教修行の結社。『蘇軾詩注解（三）』に収める作品番号一六一八の詩の注を参照。蘇軾は、自

分が前世では僧侶であったと考えていた。蘇軾「陳師仲主簿に答うる書」（『蘇軾文集』卷四九）に、「杭州に在りて嘗て寿星院に遊ぶに、門に入れば便ち曾て到れりと悟りて、能く其の院後の堂殿山石の処を言う。故に詩中に嘗て「前生已に到る」の語有り」とある。蘇軾「張子野が三絶句を寄せらるるに和す、旧遊に過る」詩の注（『蘇東坡詩集』第三册六〇一頁）を参照。2〇宿業一句 宿業は、前世でなした善悪の所業。『長阿含經』大本經（『大正藏』第一卷）に、「瞋睚の形相具わる、宿業の成す所なり」（瞋睚は、まっすぐの太腿）とある。臨辺は、辺境にあること。ここでは蘇軾が定州にあることをさす。杜甫「諸將 五首」その三（『杜詩詳注』卷一六）に「稍や喜ぶ 臨辺の王相国、肯えて金甲を銷かして春農を事とするを」とある。3〇一悟一句 鏡空は、僧の名。ここでは、蘇軾が自らを鏡空になぞらえていう。老は敬った言い方。その逸話は、『太平広記』卷三八八に引く李玫「纂異記」の「斉君房」にみえる。唐の元和初め、四十五歳になった斉君房は、旅先の錢塘で飢えに苦しんでいたところ、胡人の僧侶から「法師」と呼ばれた。その理由を尋ねると、胡僧は「子は洛中の同德寺に法華經を講ずるを憶えざるか」と、斉君房が前世では僧侶であったと述べて、食べると前生はおろか過去や未来のことともわかるという拳ほどもある褰を鉢囊から取り出した。斉君房がそれを食べると、同德寺で法華經を講じたことが昨日のように思い出された。斉君房は、それから靈隱寺へいき、鏡空という僧侶となった。4〇始知一句 円沢は、唐の洛陽惠林寺の僧の名。ここでは、思聰を円沢になぞらえていう。円沢が友人の李源と旅をした折に、一人の婦人を見かけて、自分はこの婦人の子として生まれ変わるが、十三年後の中秋の月の夜に杭州の天竺寺の外で逢おうと、李源に約束して死んだ。李源がその言葉に従って赴くと、円沢は葛洪川（杭州城外の葛嶺の付近）のほとりて牧童に生まれ変わっていた。蘇軾「僧円沢の伝」（『蘇軾文集』卷一三）を参照。円沢は、『太平広記』卷三八七に引く唐・袁郊「甘沢謠」では、円観とされている。蘇軾「永楽に過れば、文長老、已に卒せり」詩の注（『蘇東坡詩集』第三册三三三頁）を参照。5〇帰心 帰郷の念。ここでは、一韓智翹の聞書に「坡（ノ）言（フココロ）ハ、我レ定州ノ守トナルトハ云ヘドモ、帰心 常（ニ）杭州（ニ）在（ル）ゾ」（『四河入海』卷一九の三）とあるように、杭州へ再び戻りたいという蘇軾の心情をいう。〇犢佩 漢の龔遂は、七十歳になって渤海の知事に赴任し、「民に刀劍を帶持する者有らば、劍を売り牛を買わしめ、刀を売り犢（黄色の

小牛)を買わしめ、曰く、「何なんぞ牛を帯び犢を佩なびん」と、奢侈を好み田作りしなかつた民を、農作に従事させた故事(『漢書』龔遂伝)を用いる。蘇軾「山村 五絶」その二の注(『蘇東坡詩集』第二冊五〇七頁)を参照。6
 ○生術一句 生術は、長生の術。『列子』説符篇に、「昔人 不死の道を知る者有りと云う……若もし然しからば、死者奚なんぞ為れぞ生術を言う能あたはざらん哉」とある。羊鞭は、よく養生する者のあり方を示す。『莊子』達生篇に、「善く生を養う者は、羊を牧するが若ごとく然しかり、其の後ろる者を視て之に鞭うつ」とある。78〇不似・空留二句 六一泉は、杭州にある泉の名。歐陽修の号である六一居士に由来する。蘇軾は歐陽修が亡くなって十八年後の元祐四年(一〇八九)に杭州知事となり、歐陽修と交わりの深かつた杭州の僧惠勤の旧居を訪れた。惠勤はすでに亡かつたが、惠勤の二人の弟子が歐陽修と惠勤の肖像を守っていた。蘇軾が来て数か月もたたぬうちに、講堂の後方の孤山の跡から泉が湧き出し、蘇軾はそれに「六一泉」と名付けた。蘇軾「六一泉の銘 並びに序」(『蘇軾文集』卷一九)に詳しい経緯がみえる。ここでは、一韓智翊の聞書に「坡(ノ)言(フココロ)ハ、欧公ハ名ヲ杭ニ留(メ)テ六一泉ト云(フ)ハアレドモ、其(ノ)身ハ終ニ杭ヘハ到(ラ)ザ(ル)ゾ。我(レ)ハ然(ラ)ザ(ル)ゾ、是(レ)ヨリサキニ、已ニ杭ニ停タルガ、以後又(タ)杭ニ到(ル)可(キ)程ニゾ」とあるように、蘇軾は、歐陽修が杭州を訪れることなく、ただ六一泉にその名を留めるのみであつたのとは違い、自ら再訪したいと詠ずる。

前世ではあなたと一緒に修行した身ですのに、宿業で今世ではひとり最果ての地を守りおられます。自分が鏡空翁であることに気づいて、はじめてあなたが円沢というすぐれた人物であることがわかりました。

杭州に帰りたくて領民に耕作を促す務めも忘れてしまふありさまですが、養生の術には自信があります。むなしく杭州に「六一泉」の名を残しただけの歐陽先生のようにはなりたくありません。

一九九七(施三四一三六)

次韻王雄州還朝留別

王雄州が朝に還るときに留別するに次韻す

- 1 老李威名八十年
老李が威名 八十年
- 2 壁間精悍見遺顔
壁間 精悍にして 遺顔を見る
- 3 自聞出守風流似
出でて守として風流の似たりと聞いて自ら
- 4 稍覺承平氣象還
稍や覚ゆ 承平の氣象の還るを
- 5 但遣詩人歌杖杜
但だ詩人をして杖杜を歌わしめん
- 6 不妨侍女唱陽關
侍女の陽関を唱うを妨げず
- 7 内朝接武知何日
内朝 武を接ぐこと 知んぬ 何れの日ぞ
- 8 白髮羞歸供奉班
白髮 供奉の班に帰らんことを羞ず

元祐九年（一〇九四）五十九歳の作。

○王雄州 王崇拯（字は拯之）のこと。雄州は、今の河北省雄県。『蘇軾詩注解（三十一）』所収の作品番号一九九四の注を参照。王崇拯の元の詩は伝わらない。

1○老李 李允則（九五三〜一〇二八）のこと。字は垂範。威儀を事とせず、親しく民と語らつて、人情を知り、また善く士卒を撫つた。仁宗の御代に康州防禦使となり、河北でしばしば勲功を建てた。『宋史』に伝がある。○八十年 『統資治通鑑長編』巻五九の景德二年春正月乙卯（六日）の条に、「西上閣門副使の李允則、雄州に知たり」とある。景德二年（一〇〇五）から、元祐九年（一〇九四）まで、八十九年の年月をいう。2○壁間一句 一韓智翹の聞書に、「雄州ノ守護処ニハ、允則ガ御影ヲカ「画」イテ置（イ）タガ、其（ノ）遺像ハ今（ニ）至（ル）マデ精悍ニシテ、チツトモタク「弛」マヌナリガアルゾ」（『四海入海』巻一九の三）とある。雄州には李允則の肖像画が残っていた。精悍は、気力がするどく勇ましいさま。『史記』郭解伝に、「（郭）解の人と為りは、短小にして精悍なり」

とある。3〇出守 都から転出して地方の知事となること。顔延之「五君の詠 五首」その四「阮始平」(『文選』卷二二)に、「屢しば薦むれども官に入らず、一たび麾して乃ち出でて守たり」とある。〇風流 遺風。『漢書』趙充国辛慶忌伝の賛に、「其の風声気俗、古自りして然り。今の歌謡慷慨して、風流猶お存する耳」とある。風流は、『後漢書』方術伝の論に、「漢世の所謂名士なる者は、其の風流知る可きなり」とあり、風雅な情趣をさすこともある。ここでは、『宋史』李允則伝に、「上元旧と燃燈せず、允則 綵山を結び、優・楽を聚めて夜縦いままに遊ばしむ」(綵山は、上元節の際に飾り付けるやぐら状の高い舞台。優・楽は、芸人や楽人)とあるように、李允則が雄州知事としてなした上元の風雅な遊びも含めて、王崇拯がその遺風を継ぐことをいう。4〇承平 太平の世がつづくこと。『漢書』食貨志に、「王莽は漢の承平の業に因る」とある。承平の気象は、太平の世の気分をいう。范成大『吳船録』巻上に、蜀州城外について「大抵は沃野の在る所にして、二百年兵火を見ず、居民の居室は法の如く、承平の気象有り」とある。5〇杜杜 凱旋を勞う歌。『詩経』小雅の詩篇の名で、その小序に「役より還るを勞うなり」とある。6〇陽関 「陽関三疊」と称される別れのうた。蘇軾「孫莘老が贈らるるに次韻す……」の注(『蘇東坡詩集』第二冊五二二頁)、および「孔密州が五絶に和す」その一の注(同上第四冊二三七頁)を参照。7〇内朝 天子や諸侯が政務を処理したり休憩したりするところ。『蘇軾詩注解(一)』所収の作品番号一六〇〇の詩の注を参照。〇接武 足跡が接して続くこと。転じて、物事が次々と起こること。『蘇軾詩注解(十)』所収の作品番号一七三二の詩の注を参照。ここでは、王崇拯に続いて蘇軾も朝廷に還ることをいう。8〇供奉班 供奉は、門下省や中書省の侍郎など、天子の近くに勤める官僚のこと、供奉班と称された。班は、その朝会の席次をいう。杜甫「至日の遺興、北省の旧閣老と両院の故人に寄せ奉る 二首」その二(『杜詩詳注』卷六)に、「憶う 昨つて逍遙す 供奉の班、去年今日 龍顔に侍す」とある。

かの李允則の名声が轟くこと八十年、壁の肖像には精悍な面差しが遺されている。王崇拯どのがその風雅を継がれて、太平の気風が再来したようだ。

いまはただ詩人に凱旋を勞う「杖杜」のうたを歌わせよう。ここの妓女が別れの「陽関」のうたを唱うことももはや妨げまい。あなたの後に続いて朝廷に参内するのはいつのことか、白髪あたままで天子のお側に戻るのも恥ずかしいことではあるが。

(担当 中 純子)

一九九八(施三四—三七)

三月二十日多葉杏盛開

三月二十日、多葉の杏 盛んに開く

- 1 零露 月窓に 泣り
れいろう げつすざい しんたんだ
- 2 温風 散晴葩
おんふう さんせいば
- 3 春工 了不睡
しゆんこう じょうふすい
- 4 連夜 開此花
れんや かいしこ
- 5 芳心 誰か 剪刻せん
ほうしん たれ せんこく
- 6 天質 自 清華
てんしつ じよ せいかに
- 7 惱客 香有無
なうかく かうゆうむ
- 8 弄粧 影横斜
じやうしやう えい おうしや
- 9 中山 古 戦国
ちゆうざん こ せんこく
- 10 殺氣 浮高牙
さつぎ うたかぎ

11 叢臺餘袂服

叢そう臺だい 餘あま袂けんぶく服ふくを余あまし

12 易水雄悲筋

易えい水すい 雄ゆう悲ひ筋か 雄ゆうなり

13 自從此花開

此この花はなの開ひらきて自よ従り

14 玉肌洗塵砂

玉ぎよつぎ肌き 塵じん砂さを洗あらう

15 坐令游俠窟

坐いながら游ゆう俠きやうの窟くつをして

16 化作温柔家

化かして温おん柔じゆうの家いえと作ならしむ

17 我老念江海

我われ老おいて江かう海かいを念おもい

18 不飲空咨嗟

飲のまずして空むなしく咨し嗟さす

19 劉郎歸何日

劉りゆう郎らう 歸かえらんこと何いれの日ひぞ

20 紅桃鑠殘霞

紅かう桃とう 殘ざん霞かに鑠かがやかん

21 明年花開時

明めい年ねん 花はなの開ひらかん時とき

22 舉酒望三巴*

酒さけを挙あげて三さん巴ばを望のぞまん

〔原注〕

蓋欲請梓州而歸也（蓋し梓州を請いて歸らんと欲するなり）

元祐九年（一〇九四）、五十九歳の作。

○多葉杏 花卉の多い花を咲かせる杏。千葉杏とも称する。南宋・張炎『三姝媚』詞（『山中白雲詞』卷一）の詞牌の添え書きに、「海雲寺の千葉杏二株、奇麗にして観る可し。江南に無き所なり」とある（清・江昱『山中白雲詞疏証』によれば、海雲寺は、南宋から元にかけて北京にあった寺院の名）。

1 ○零露 落ちる露。『詩經』鄭風「野有蔓草」に、「野に蔓草有り、零露漙漙たり」とある。○泫 したたる。謝靈

運「斤竹澗従り嶺を越えて溪行す」詩（『文選』卷二二）に、「巖下に雲 猶お洑る」とある。○月蕊 蕊は、花のしべ。月は、その白さの形容。2 ○温風 あたたかな風。『礼記』月令「季夏之月」に、「温風始めて至り、蟋蟀壁に居る」とある。○晴葩 晴天のもとで咲く花。3 4 ○春工・連夜二句 唐の則天武后のとき、卿相たちは春の開花にことよせて、武后を上林に誘い出す陰謀を立てた。これに疑念を抱いた武后は、以下の詩を詠じて詔として宣布した。「明朝 上苑に遊ぶ、火急 春を報じて知らしむ、花は須く連夜に発くべし、曉風の吹くを待つこと莫かれ」と。朝になると上林の花はあまねく開花したという（『唐詩紀事』卷三）。春工は、春のたくみ。万物をはぐくむ者としての春を擬人化している。『蘇軾詩注解補（二）』に収める作品番号〇九一二の詩の注を参照。連夜は、夜を徹して。宋之問「広州の朱長史が宅にて妓を観る」詩（『全唐詩』卷五三）に、「歌舞 須く連夜なるべし、神仙 帰るを放す莫かれ」とある。3 4 句の注に引く則天武后の詩を併せて参照。5 ○芳心 かぐわしい花の高潔な心。「子由の「園中の草木を記す」に和す 十首」その四の注（『蘇東坡詩集』第一冊四九六頁）、及びその十の注（同五〇六頁）を参照。○剪刻 切りぎざむ。韓愈「李花 二首」その二（『韓昌黎集』卷五）に、「誰か千地万堆の雪を將て、剪刻して此の連天の花と作す」とある。6 ○天質 生まれつきの美しいすがた。「薄命の佳人」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊五二九頁）を参照。○清華 清らかで美しいこと。謝混「西池に遊ぶ」詩（『文選』卷二二）に、「景昃きて鳴禽は集まり、水木は清華を湛う」とある。8 ○影横斜 林逋「山園の小梅 二首」その一（『林和靖詩集』卷二）に、「疎影 横斜 水是清浅、暗香 浮动 月は黄昏」とある。9 ○中山一句 中山は、定州の古称。戦国時代、その地に中山国があったことによる。『太平寰宇記』（卷六二）定州の条に、「戦国の時は中山国と為る。後、魏の併する所と為り、亦た晉に属し、竟に趙の併する所と為れり」とある。蘇軾が定州に赴任する際の作、「東府の雨中に子由と別る」詩（『蘇東坡詩選』二二六頁）にも、「今年 中山に去り、白首 帰るに期無し」という。10 ○殺氣 戦争の気配。岑参「九日、使君の席にて衛中丞の長水に赴くに餞し奉る」詩（『岑嘉州詩』卷五）に、「台上の霜風草木を凌ぎ、軍中の殺氣 旌旗に傍う」とある。○高牙 そばだつ牙旗。牙旗は、將軍の陣營に立つ大きな軍旗。潘岳「閔中の詩」（『文選』卷二〇）に、「桓桓たる梁征、高牙 乃ち建てり」とある。11 ○叢台一句 『漢書』趨陽伝に、

「夫れ全趙の時、武力の鼎士 叢台の下に核服する者、一旦 市を成す」とあり、顔師古の注に「核服は、盛服なり。鼎士は、鼎を挙ぐる士なり。叢台は、趙王の台なり。邯鄲に在り」とある（全趙は、分割される前の趙）。12○易水一句 戦国時代、秦王政を暗殺するよう、燕の太子丹の命を受けた荊軻が、易水のほとりて一同に見送られつつ、「風蕭蕭として易水寒く、壮士 一たび去つて復た還らず」と歌った（『史記』刺客列伝の荊軻の伝）。この時は高漸離が筑を撃ち、荊軻がこれに和したと記される。悲筋は、悲しげな葦笛の音。「是の日、下馬碛に至り、北山の僧舎に憩う……」詩の注（『蘇東坡詩集』第一冊四六七頁）を参照。以上の二句は、いずれも定州に関連する故事を用いる。

14○玉肌 白くうるわしい肌。『蘇軾詩注解（二十九）』に収める作品番号一九七五の詩の注を参照。15○游俠窟 遊俠たちの住みか。郭璞「遊仙詩 七首」その一（『文選』卷二二）に、「京華は遊俠の窟、山林は隱遯の棲」とある。

16○溫柔家 温かく柔らかな家。「李邦直が「旧に感ず」に次韻す」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊二五三頁）を参照。以上の四句について、一韓智翹は、「此（ノ）杏花ハ、此処ニ生ジツラウゾ。サテ、此（ノ）花開キテヨリ、其（ノ）花ノ玉肌清冷ラ以テ、戦国ノ塵沙臭穢ノ氣ヲ一洗シテ、游俠ノウデ、コキノラル処ノ窟宅ヲ変ジテ、溫柔ノ処トナシタゾ」と記す（『四河入海』卷一四の三）。17○江海 朝廷を離れた川や海のほとり。江湖に同じく、隱遁者の住まう所のたとえ。「呂希道が和州に知たるを送る」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊五三頁）を参照。18○不飲一句 韓愈「晚菊」詩（『韓昌黎集』卷四）に、「今来 復た飲まず、見る毎に恒に咨嗟す」とある。1920○劉郎・紅桃二句 劉郎は、唐の劉禹錫のこと。朗州（湖南省）に左遷された劉は、元和十年（八一五）に都の長安に帰ったとき、玄都観に多くの桃の木が植えられて花の名所になっているのを見て、「元和十一年、朗州自ら召を承けて京に至り、戯れに花を看る諸君子に贈る」と題する七言絶句を作った（『劉夢得文集』卷四。十一年は、十年の誤りとされる）。その転・結句、「玄都観の裏 桃 千樹、尽く是れ劉郎が去りし後に栽えたり」の二句が、自分が左遷された後に取り立てられた者を諷したものとされ、再び連州（広東省）に左遷された。太和二年（八二八）に都に戻ったときには、玄都観の桃の木はすっかりなくなっており、彼は更に七言絶句「再び玄都観に遊ぶ 絶句 并びに引」（同）を作った。その引のなかで前の詩について、「人人皆な言えらく、「道士の手植せる仙桃有り、観に満ちて鏤たる晨霞の如し」と。遂に

前篇有りて以て一時の事を志す」と言及し、詩の転・結句に、「桃を種えし道士 何処にか帰す、前度ぜんどの劉郎 今又た来たる」とうたった。一韓智翹は、「劉郎ハ、坡自ラ比ヌゾ。坡（ノ）言（フココロ）ハ、我レ再ビ朝廷ヘ帰ルコトハ有ル可カラザルゾ。アアサコソハ紅桃残霞ニ鏢かぎイテコソアルラウゾ」と記す。22〇三巴 四川省の東部にあつた巴郡・巴東・巴西をさす。「荊州 十首」その四の注（『蘇東坡詩集』第一冊一六四頁）を参照。○〔原注〕 梓州は、四川省の地名。今の四川省三台県。北宋では劍南東道に属する（『太平寰宇記』卷八二）。

月に照らされた花びらに露がしたり、暖かい風が晴天に咲く花を散らす。春の神が一晩じゅう眠ることなく精をだし、こうしてこの花を咲かせた。かぐわしい香りを漂わせるその心は、切り貼りして作ろうとしてもできるものではなく、天より授けられた美しいその姿はおのずと清く華やかだ。あるかなきかの香りは行きかう人を悩ませ、美しくよそおつた枝の影が斜めにのびる。

ここの山はいにしえより戦いの地で、旗指物を見上げたなら、そこにはいくさの気が感じられる。叢台には盛装した武勇の士が集まり、易水に響く悲壮なあしぶえの調べが心をたかぶらせる。それがこの花がいったん開いてからは、まるで玉の肌が戦場の砂ぼこりを一掃しよう。何もしいままで俠客たちのすみかを、温かく柔らかな家に変えてしまった。

さて老いては江南の地に暮らすのを願っている私だが、楽しく酒を飲むこともなくただため息をついてばかり。劉郎が都にもどれるのはいつたい何時のことだろう。その都では消えのこつた夕焼け雲に桃花があかく輝いていよう。来年の花の季節には、酒杯を挙げてわが三巴の地を望みたいものだ。

（担当 西岡 淳）

一九九九（二〇〇一）（施三四一三八～四〇）

三月二十日開園 三首

三月二十日、園を開く 三首

一九九九（施三四一三八）

その一

- 1 雪髯霜鬢語僮儻
せつぜん そうひん 語 ご 僮儻 そうどう
- 2 淡蕩園林取次行
たんとう えんりん 取次 しゆじ
- 3 要識將軍不凡意
將軍不凡の意を識し
- 4 從來祇啜小人羹
從來 祇だ啜る 小人の羹

〔原注〕 是日散父老酒食（是の日、父老に酒食を散ず）

元祐九年（一〇九四）、五十九歳の作。

○開園 宋代、州の長官は毎年春に官舎の庭園を開放し、父老に酒食をふるまったといわれる。蘇軾「孔密州が五絶に和す、春、西園に歩いて寄せらる」詩（『蘇東坡詩集』第四冊二三八頁）に「歳歳 園を開いて故事と成し、年年 行樂して春に幸かず」とある。その注を参照。

1○雪髯一句 雪髯霜鬢は、雪のように真っ白なほおひげとびんの毛。老人のこと。僮儻は、粗野なさま。僮儻に同じ。作品番号一八三四「閻立本が職貢図」詩の注（『蘇軾詩注解（十八）』）を参照。2○淡蕩 ゆつたりとしてのどかなこと。澹蕩とも書く。鮑照「白紵歌に代わる辞 二首」（『玉台新詠集』卷九）その二に「春風 澹蕩 思いをし

て多からしむ、天色 淨緑 氣は妍和」とある。○取次 勝手に。みだりに。晉・葛洪『抱朴子』祛惑篇に、「此の兎当に卿が門宗を興こすべし、四海將に其の賜を受けんとす。但だ卿が家のみならず、取次にす可からざるなり」とある。3○將軍 蘇軾のこと。当時は定州知事兼安撫使馬歩軍都總管であった。4○従来一句 噉は、すする。のむこと。小人は、身分の低い人。また、貧しい人。『春秋左氏伝』隱公元年に、「(穎考叔は)公に獻ずること有り。公これに食を賜う。食して肉を舍く。公之を問う。對えて曰く、「小人母有り。皆な小人の食を嘗む。未だ君の羹を嘗めず。請う、以て之を遺らん」と」とある。

ひげも鬢も真つ白な田舎の老人たちは耳慣れぬ土地の言葉をしやべりながら、のどかな庭園を勝手気ままにあちこち歩き回っている。今日のこの將軍の格別なもてなしの心を知ろうとするなら、私だつて以前から貧しい人たちと同じスープを飲んでいるだけなのだと、ということをつかたつてほしい。

二〇〇〇(施三四―三九)

その二

- 1 西園牡籥夜沈沈 西園の牡籥 夜沈沈
- 2 尙有游人臥柳陰 尙お游人の柳陰に臥する有り
- 3 鶴睡覺時風露下 鶴睡 覚むる時 風露下り
- 4 落花飛絮滿衣襟 落花 飛絮 衣襟に滿つ

1○牡籥 牡と籥(鉦に同じ)は、いづれもかぎのこと。戸締りの錠前とそれにさし入れて開ける器具。ここでは施錠することを使う。3○鶴睡 唐・項斯「胡氏の溪亭に宿る」詩(『全唐詩』卷五五四)に「鶴睡りて松枝定まり、

螢帰りて葛葉垂^たる」とある。宋代の文人には鶴を養う風習があるため、この西園では鶴が飼われている可能性がある。西の庭園はすでに錠をおろして夜更けを迎えたが、柳の下には未だ寝ている見物客がいる。鶴が目覚ますころには風が吹き露が降りてきて、衣服には花びらや柳絮がいつぱいにふりかかるだろう。

二〇〇一（施三四一四〇）

その二

- | | | | |
|---|---------|---|--|
| 1 | 鬱鬱蒼髯眞道友 | 鬱鬱 ^{うつうつ} たる蒼髯 ^{そうぜん} | 眞 ^{しん} の道友 ^{どうゆう} |
| 2 | 絲絲紅萼是鄉人 | 糸糸 ^{しし} たる紅萼 ^{こうがく} | 是 ^こ れ郷人 ^{きやうじん} |
| 3 | 何時翠竹江村路 | 何 ^{いず} れの時 ^{とき} か | 翠竹 ^{すいちく} 江村 ^{かうせん} の路 ^{みち} |
| 4 | 送我柴門月色新 | 我 ^{われ} を柴門 ^{さいもん} | 月 ^{げつ} 色 ^{しよく} の新 ^{あら} たなるに送 ^{おく} らん |

〔原注〕蒼髯、松也、紅萼、海棠也（蒼髯、松なり。紅萼、海棠なり）

1〇鬱鬱 樹木のこんもりと盛んにしげるさま。蒼髯は、松の異称。作品番号一九九四「中山の松醪、雄州の守 王引進に寄す」詩の注（『蘇軾詩注解（三十二）』）を参照。〇道友 志を同じくする者。陳子昂「冀侍御・崔司議に贈別す 並びに序」（『全唐詩』卷八四）の詩序に「一世の逸人、千里の道友に寄す」とある。2〇糸糸一句 糸糸は、細かなさま。唐・李余「寒食」詩（『全唐詩』卷五〇八）に「玉輪江上 雨 糸糸たり、公子 春に遊びて酔いて知らず」とある。紅萼は、赤い花のうてな。転じて、赤い花。謝靈運「從弟の恵連に酬ゆ」詩（『文選』卷二五）に「山桃は紅萼を発^{ひら}き、野蕨は紫苞^{しほ}を漸^{すす}む」とある。カイドウの花は赤色で、宋代の四川ではよく植えられていたため、蘇

軾は「郷人」と呼んだ。34〇何時・送我二句 杜甫「南隣」詩（『杜詩詳注』巻九）に「白沙 翠竹 江村の暮れ、相送れば 柴門 月色新たなり」とある。

うつそうとした青い松は本当にわが同志であり、細く垂れた赤いカイドウはこれこそわが同郷である。いつの日にか竹で覆われるふるさとの川辺の小路を、（蜀の父老たちは）昇ったばかりの月明かりのなかで柴の戸まで送ってくれるだろうか。

（担当 蔡毅）

二〇〇二（施三四―四一）

次韻王雄州送侍其涇州

王雄州が侍其涇州を送るに次韻す

- | | | |
|---|---------|--|
| 1 | 威聲又數中興年 | 威聲 <small>いせい</small> 又た數う <small>またかず</small> 中興の年 <small>ちゆうこうとし</small> |
| 2 | 二虜行當一矢聯 | 二虜 <small>にりよ</small> 行くゆく當に <small>まさ</small> 一矢に聯ぬべし <small>いつしつら</small> |
| 3 | 聞道名城得真將 | 聞道 <small>きくなら</small> 名城 <small>めいじょう</small> 真將 <small>しんじょう</small> を得たりと <small>え</small> |
| 4 | 故應驚羽落空弦 | 故に心 <small>ゆえ</small> に驚羽 <small>きょうう</small> 空弦 <small>くうげん</small> に落つべし <small>お</small> |
| 5 | 追鋒歸去雄三衛 | 追鋒 <small>ついはう</small> 歸り去つて <small>かえ</small> 三衛 <small>さんゑい</small> に雄たらん <small>ゆう</small> |
| 6 | 授鉞重來定十連 | 鉞を授かり <small>えつ</small> て重ねて來たつて <small>かさ</small> 十連 <small>じゅうれん</small> を定めん <small>さだ</small> |
| 7 | 別酒回頭便陳跡 | 別酒 <small>べつしゆ</small> 頭を回らさば <small>めく</small> 便ち陳跡 <small>すなわちんせき</small> |
| 8 | 號呶端合發初筵 | 号呶 <small>ごうたう</small> 端 <small>たま</small> に合 <small>あ</small> に初筵 <small>しよえん</small> に發すべし <small>はつ</small> |

元祐九年（一〇九四）、五十九歳の作。

○王雄州 王崇拯のこと。字は拯之。『蘇軾詩注解（三十）』に収める作品番号一九九四の詩の注を参照。雄州は、今の河北省雄県。○侍其涇州 侍其は、複姓の一つ。涇州は、今の甘肅省涇川県。この人物については伝未詳。王崇拯の元の詩は伝わらない。

1 ○中興 再び盛んになること。もとは「興に中る」意。『詩経』大雅（蕩之什）「烝民」詩の小序に、「賢に任じ能を使う、周室中興す」とある。2 ○二虜 馮応榴は西夏の国主とその母を指す可能性を指摘するが、王崇拯が嘗て宋の使者として遼に赴いた経験をもつこと、雄州は遼に、涇州は西夏にそれぞれ対峙する位置にあることなどを考慮して、ここでは西夏と遼の両国と解する。○一矢聯 一本の矢で複数をつらぬくこと。曹植「名都篇」(『文選』卷二七)に、「左に挽き 因りて右に発し、一たび縦ては両禽連なる」とある。3 ○真将 真の將軍。將軍のなかの將軍。皮日休「七愛詩 並びに序」(『皮氏文藪』卷九)の序に、「大乱を定むるは、必ず真將有り。李太尉(李晟)を以て真將と為す」とある。4 ○故応一句 『戦国策』楚策四(校注卷五)にみえる、更羸が魏王のために弓を「虚発」して、飛ぶ雁を落とした故事による(「空弦」の表現は、蘇軾に始まると思しい)。更羸はそのわけを魏王に説明して、「其の飛ぶこと徐かにして鳴くこと悲し。飛ぶこと徐かなる者は、故瘡傷めばなり。鳴くこと悲しき者は、久しく群を失えばなり。故瘡未だ息えずして、驚心未だ去らざるなり。弦音を聞き、引いて高く飛べんとして、故瘡のために墮ちたるなり」といった。5 ○追鋒 早駆けの車、追鋒車のこと。『三国志』魏書・高貴郷公伝の、甘露元年夏四月の条の裴松之注に引く傳暢『晉諸公贊』に、「(司馬)望の外に在るを以て、特に追鋒車、虎賁の卒五人を給し、集会有る毎に、望 輒ち奔馳して至る」とある。『晉書』輿服志には、追鋒車について、「追鋒の名は、蓋し其の迅速なるに取るなり」という。○三衛 唐宋の禁衛軍の称。唐では、親衛・勳衛・翊衛を三衛、宋では、殿前司・侍衛親軍馬軍司(または侍衛司馬軍)・侍衛親軍歩軍司を三衛(または三衛)といった。6 ○授鉞 君主が將軍に斧鉞(斧と鉞)を授け、国家の兵権を付与すること。『淮南子』兵略訓に、「凡そ国に難有れば、君は宮自ら將を召して之に詔して曰く、……主 親ら鉞を操り、頭を持ちて將軍に其の柄を授けて曰く、「此れ従り上、天に至るまでの者、將軍之を制せよ」

と。復た斧を操り、頭を持ちて將軍に其の柄を授けて曰く、「此れ従り下、淵に至るまでの者、將軍之を制せよ」とある。○十連 連は、十の国をまとめていう呼称。『礼記』王制に、「十国 以て連と為す、連に帥有り」とある。7○陳跡 過去のあと。むかしの物事のなごり。王羲之「蘭亭の序」(『晉書』王羲之伝)に、「向の欣ぶ所は、俛仰の間に、已に陳跡と為る」とある。

天子のご威光が辺地を震わせたその上に、新たに中興の年を数えるいま、遼・夏の二虜などいずればただ一本の矢で射連ねられようというもの。このたびは防衛の拠点として知られる涇州に將軍の中の將軍がご着任とか。ならば驚いて飛ぶ鳥は弓弦の空音にも落ちるであろう。

早駆けの車を飛ばして急ぎご赴任になり、(功成つて後に)ご帰還になれば三衛諸將軍の筆頭となつて、天子より鉞を賜わつて再び北のかた百国を平定なされよう。さて今、ここでの別れの杯も、たちまちのうちに昔の語りごととなることでしょう。ならばこの宴も初めから騒いで賑やかにやりましょう。

二〇〇三(施三四—四二)

臨城道中作 并引

臨城道中の作 并びに引

予初赴中山、連日風埃、未嘗了了見太行也、今將適嶺表、頗以是爲恨、過臨城、内丘、天氣忽清微、西望太行、草木可數、岡巒北走、崖谷秀傑、忽悟歎曰、吾南遷其速返乎、退之衡山之祥也、書以付邁、使志之、

予初め中山に赴きしとき、連日風埃ありて、未だ嘗て了了として太行を見ざるなり。今將に

嶺表に適かんとし、頗る是を以て恨みと為す。臨城・内丘を過ぐるとき、天氣忽ち清徹なり。西のかた太行を望めば、草木數う可く、岡巒北に走り、崖谷秀傑なり。忽ち悟りて嘆じて曰く、吾が南遷其れ速やかに返らんか、退之が衡山の祥なり、と。書して以て邁に付し、之を志さしむ。

紹聖元年（一〇九四）、五十九歳の作。この年の四月、朝政を誹謗したとして弾劾され、知定州より知英州に貶せられた。その英州（広東省）に向かう途上の作（この年の六月には惠州安置を命じられる）。

○臨城 河北省の県名。北宋では趙州に属した（『太平寰宇記』卷六〇）。○中山 定州の古称。前掲の作品番号一九九八の詩の注を参照。○太行 山西省と河北・河南両省に連なる太行山脈のこと。定州はその北部の東側に位置する。○嶺表 五嶺（湖南省の衡山から、東のかた海に至るまでの山系で、大庾嶺など五つの嶺）の南側の地域。広東・広西一带をいう。○内丘 河北省の県名。北宋では邢州に属した（『太平寰宇記』卷五九）。○清徹 清く澄みきっていること。○岡巒 岡と山。○崖谷 深い谷。○秀傑 すぐれて傑出していること。○退之衡山之祥 唐の貞元十九年、韓愈は上疏して宮市を批判したことで徳宗の怒りをかき、連州（広東省）の陽山の令に貶せられた。その二年後、順宗の即位に際して大赦があり、韓愈も赦されて陽山を離れ、北に向かった。このとき衡山（南嶽）の廟に詣でて記したのが、「衡嶽廟に謁し、遂に嶽寺に宿して、門樓に題す」詩（『韓昌黎集』卷三）で、「我れ来たつて正に逢う 秋雨の節、陰氣晦昧にして清風無し、心を潜めて黙禱すれば応有るが若し、豈に正直の能く感通するに非ざらんや、須臾にして静かに掃いて衆峰出で、仰ぎ見れば突兀として青空を撐う、……蛮荒に竄逐せられて幸いに死せず、衣食纒かに足りて 長く終わらんことに甘んず」と、悪天候に妨げられて全く見えなかつた衡山が、その姿を現わすに至つた経緯について詠じている。○邁 蘇邁は蘇軾の長子。字は伯達。嘉祐四年（一〇五九）の生まれで（『蘇軾年譜』上冊七六頁）、雄州防禦推官、知河間県事などを務めた。このとき三十六歳であつた。『蘇軾詩注解（二二）』に収める作品番号一八五一の詩の注を参照。『宋詩紀事』（卷三四）蘇邁の項に引く『江隣幾雜志』に、「後、東坡の惠州に貶せられしとき、伯達 潮の安化の令たらんことを求め、以て親を饋うに便ならしむ。果たして官に卒す」

とある（潮州は広東省に属するが、安化が潮州の県名であるかは未詳。また、現行の宋・江休復『江隣幾雜志』にはこの条は見えない）。○志 しるす。書きとどめること。

私が中山に赴任したときには、日々砂ぼこりのまじった風が吹いて、太行山脈の姿をはっきりと目にすることがなかった。このたび嶺南の地に向かうにあたって、そのことをいささか憾みとしていたのだった。ところが臨城・内丘の地を過ぎるとき、空が清らかに澄みわたった。西方の太行山脈を見やったところ、草木が数えられるほどありありと望まれ、山や丘が北へと続き、深い谷々はすぐれて美しい。ふと悟って感嘆して言うには、私は南へと流されるが、すぐに帰ってくるだろう。これは韓退之の前に衡山が姿をあらわしたあの瑞祥と同じだ、と。そこでこの詩を書してそれを邁に託し、記録させることにした。

1 逐客何人著眼看

逐客 何人か眼を著けて看ん

2 太行千里送征鞍

太行 千里 征鞍を送る

3 未應愚谷能留柳

未だ心に 愚谷 能く柳を留むべからず

4 可獨衡山解識韓

独り衡山のみ韓を識るを解す可けんや

1○逐客 朝廷より放逐された者。杜甫「李白を夢む 二首」（『杜詩詳注』巻七）その一に、「江南は瘴癘の地、逐客 消息無し」とある。○著眼 眼をとめる。賀鑄「木蘭花」詞（『東山詞』巻三）に、「朝来 眼を沙頭に著けて認む、五兩竿揺れて風色順ぐ」（五兩竿は、風向きを観測する器具）とある。○太行 引の注を参照。○征鞍 旅ゆく人の乗る馬のこと。杜審言「嵐州を經行す」詩（『全唐詩』巻六二）に、「自ら驚く 遠役に牽かれ、艱險 征鞍を促すを」とある。3○未応一句 柳宗元「愚溪詩序」（『柳河東集』巻二四）によれば、永州（湖南省）に流された柳宗元は、その地の瀟水に注ぐ谷川を愛し、自らが愚かさゆえに流論に遭ったことから、いにしへの愚公の谷（『説苑』

政理篇にみえる)になぞらえて、その谷川を愚溪と名付け、「八愚」の詩を作つて石に刻んだ。彼は十年ものあいだ永州から離れられず、その間に永州八記などの著名な山水遊記を書いている。「荆門の張都監維の惠泉の詩に和せらるるに次韻す」詩の注(『蘇東坡詩集』第一冊一八六頁)を参照。○可独一句 引の注を参照。韓愈が、自らの「正直」さが衡山に認められたと詠じたことをふまえる。

逐われゆくこの身に目をとめる人としてないけれど、太行山が千里に連なる姿をあらわして、私をずっと見送ってくれる。このたびは、きつと愚溪が柳子厚をその地に引き留めたようにはならないだろう。許されて還る韓退之の真心に感じて姿をあらわした衡山と同じく、太行山は私を知ってくれたのだ。

(担当 西岡 淳)

二〇〇五 (施三四―四三)

過湯陰市得豌豆大麥粥示三兒子

湯陰の市に過りて豌豆・大麥の粥を得て三兒子に示す

- | | | |
|---|-------|-----------|
| 1 | 朔野方赤地 | 朔野 方に赤地 |
| 2 | 河孺但黃塵 | 河孺 但だ黄塵 |
| 3 | 秋霖暗豆莢 | 秋霖 豆莢に暗く |
| 4 | 夏旱隳麥人 | 夏旱 麥人 隳す |
| 5 | 逆旅唱晨粥 | 逆旅 晨粥を唱え |
| 6 | 行庖得時珍 | 行庖 時珍を得たり |

- 7 青斑照匕箸 青斑 せいはん 匕箸 ひちよ を照らし
 脆響鳴牙齶 脆響 ぜいきやう 牙齶 がきん に鳴る
 8 玉食 故吏を謝す 玉食 ぎよく 故吏 こり を謝す
 9 玉食謝故吏 玉食 ぎよく 謝 しや 故吏
 10 風餐便逐臣 風餐 ふうさん 逐臣 ちくしん に便なり
 11 漂零竟何適 漂零 ひようれい して竟 ついに 何 いづ くにか適 ゆ かん
 12 浩蕩寄此身 浩蕩 こうとう として此 こ の身 み を寄 よ す
 13 爭勸加餐食 爭 あらし い勸 すす めて餐食 さんしよく を加 くわ えしむ
 14 實無負吏民 實 まこと に吏民 りみん に負 おむ くこと無 な し
 15 何當萬里客 何 いか か當 まさ に萬里 ばんり の客 かく
 16 歸及三年新 歸 かえ って三年 さんねん の新 しん に及 およ ぶべき

紹聖元年（一一〇九四）、五十九歳の作。

○湯陰 河南省の湯陰県。○豌豆大麦粥 豌豆入りの大麥がゆ。『国訳本草綱目』卷二二「穀部」大麥に、「時珍曰く、大麥は飯となし食饗として益がある。粥に煮れば甚だ滑かだ」とある。○三兒子 蘇軾の三人の息子たち。蘇邁、蘇迨、蘇邁。蘇邁については、本注解に収める作品番号二〇〇三の詩の引の注を参照。蘇迨、蘇邁については、『蘇軾詩注解（二十）』に収める作品番号一八五一の詩の詩題の注を参照。紹聖元年のこの時、迨は二十五歳、邁は二十三歳であった。

12 ○朔野・河壩二句 朔野は、北方の野。赤地は、旱のため穀物がまったく実らない土地をいう。蘇軾「起伏龍行并びに叙」の注（『蘇東坡詩集』第四冊五二二頁）を参照。河壩は、川の岸辺の濡れて軟らかい所。『史記』河渠書に、「五千頃は故尽く河壩の棄地」とあり、韋昭の注に、「河辺に縁るの地也」とある。黄塵は、黄色い土埃。『後漢書』

馬融伝に、「黃塵は勃滂、闇きこと霧の昏きが若し」とある。二句は、河北の地の、耕作に適さない厳しいありさまを述べている。34 ○秋霖・夏旱二句 秋霖は、秋の長雨。暗は、光沢を失わせること。引いて、だめにする。杜甫「瘦馬行」(『杜詩詳注』卷六)に、「皮乾きて剥落 泥滓雜わり、毛暗くして蕭条 雪霜連なる」とある。豆莢は、豆のさや。蘇軾「元修の菜 并びに叙」詩(『合注』卷二二)に、「豆莢 円くして且つ小、槐芽 細くして而も豊なり」とある。夏旱は、夏の日照り。麦人は、麦の仁。麦の実。人と仁は同音通用の字。3句の「秋霖」と4句の「夏旱」と、季節の先後が逆になっていることについて、『四河入海』卷一の三に引く一韓智翊の聞書に、「押韻二因リテ、秋霖ヲ先ニシテ夏旱ヲ后ニス。必ず夏旱スレバ秋ニナリ、用ニモナイニ、霖雨ガ豆ノ実ノイル時分ニ、ツヨウフルゾ」とある。5 ○逆旅一句 逆旅は、旅舎。『莊子』山木篇に、「陽子 宋に之き、逆旅に宿す」とある。晨粥は、朝がゆ。晨は、早朝。唱は、先がけてうたい始めること。蘇軾「歲晚 相与に餽問するを餽歳と為す、…… 守歳」詩に、「晨雞 且く唱うることを勿かれ、更鼓 搗を添えんことを畏る」とある。その注(『蘇東坡詩集』第一冊三四頁)を参照。一句は、粥が朝一番を告げることを用いる。6 ○行庖 旅中の食事。梅堯臣「元日」詩(『宛陵文集』卷二六)に、「行庖 海物を得たり、鹹酸 何ぞ瑣碎なる」とある。○時珍 句の珍味。晋・張華「上巳篇」(『太平御覽』卷三〇)に、「伶人は新楽を理め、膳工は時珍を献る」とある。7 ○青斑一句 青斑は、わかい豌豆のこと。『国訳本草綱目』卷二四「穀部」豌豆に、「嫩いときは青色だが、老いと斑麻になるものだ。故に……青斑、麻累などの名称がある」とある。匕箸は、匙と箸。蜀の劉備が曹操から、天下の英雄は我々二人だけだと言われ、驚いて匕箸を取り落としたという故事がある(『三国志』蜀志「先主伝」)。粥を食する道具として、匙と箸いずれの可能性もあるが、ここでは匙と解しておく。青木正児「用匙喫飯考」(『華国風味』)所収。また『青木正児全集』卷九所収)参照。8 ○脆響 齒ざわりのよい音。脆は、やわらかなさま。『韓非子』揚推に、「夫れ香美味、厚酒肥肉は、口に甘きも形を疾ましむ」とある。杜甫「鄭広文に陪して何將軍の山林に遊ぶ 十首」その七(『杜詩詳注』卷二二)に、「脆は生菜の美を添え、陰は食單の涼を益す」とある。蘇軾「雨後 菜圃を行る」詩(『合注』卷三九)に、「芥藍 菌蕈の如く、脆美 牙頰に響く」とあり、後の句が一句と似る。○牙齦 齒と齒ぐき。9 ○玉食一句 玉食は、美食や珍味。蘇軾「黃魯直の

贈らるる古風に次韻す 二首」その一に、「玉食 慘として光無し、大いなる哉 天宇の間」とある。その注（『蘇東坡詩集』第四冊六二二頁）を参照。謝は、辞退する。『史記』項羽本紀に、「嬰 謝すること能わず、遂に強いて嬰を立てて長と為す」とある。故吏は、前に使っていた下役人。ここでは、都での任を解かれ、北の定州から南の英州へと、僻地の任を続けざまに命ぜられて移る蘇軾自らをいう。一韓智翊の問書に、「言（フココロ）ハ、京ノ方デサメク時コソ、玉食ヲバ食ベ、今ハ其（ノ）様ナル結構ナル玉食ハナイ程ニ、サテ、謝故吏ト云（フ）ゾ。謝ハ、謝絶ノ義ゾ」とある。10○風餐 吹きさらしの所で食事をとる。また、風雨にさらされて苦勞することをいう。鮑照「升天行」（『文選』卷二八）に、「風を餐らいて松柏に委ね、雲に臥して天行を恣にす」とあり、杜甫「舟中」詩（『杜詩詳注』卷二二）に、「風餐す 江柳の下、雨臥す 駅樓の辺」とある。蘇軾「將に筠に至らんとして、遲・適・遠三猶子に寄す」詩（『合注』卷二三）に、「露宿風餐す 六百里、明朝 馬に飲う 南江の水」とある。○逐臣 朝廷から罪を得て追われた臣下。蘇軾「広陵にして三同舎に会す、各おの其の字を以て韻と為す…… 劉莘老」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊一六〇頁）を参照。ここでは、蘇軾が自らを擬している。○便 都合がよい。11○漂零 さすらって落ちぶれたさま。杜甫「客亭」詩（『杜詩詳注』卷一一）に、「多少ぞ 残生の事、飄零 転蓬に任す」とある。12○浩蕩 長く広く続くさま。○寄其身 寄身は、仮に身を寄せること。此身は、蘇軾自らをいう。蘇軾「子由の契丹に使用するを送る」詩（『蘇東坡詩選』二四七頁）に、「雲海 相望んで 此の身を寄す、那ぞ遠適に因って更に巾を沾さん」とある。13 14○争勸・実無二句 加餐食は、努めて食事をとるよう勧めること。「古詩十九首」その一（『文選』卷二九）に、「棄捐して復た道う勿かれ、努力して餐飯を加えよ」とある。また、杜甫「暫く白帝に往き、復た東屯に還る」詩（『杜詩詳注』卷二〇）に、「加餐 老を扶く可し、倉廩 飄蓬を慰む」とある。吏民は、役人と民。ここでは、定州の民をいう。二句は、英州赴任の命を受けて定州を去る蘇軾に対し、定州の人々が懇ろに蘇軾の身を案じてくれたことを述べて、今、こうしてささやかな食の愉しみを見出しているのも、彼らの願いに沿うものだとしている。瑞溪周鳳の説に、「我（レ）今嶺南ニ赴ク。然モ此ノ間ノ人、我ニ飲食ヲ勸ム。其ノ意 殷勤。因リテ以テ是ヨリ先キ、我ガ故ニ吏民ニ負ガザルコトヲ知ル。然ラズンバ則（チ）今 何ニ由リテカ此（ク）ノ如（カラ）ン乎」と

ある。15 16〇何当・帰及二句 万里客は、万里の果てへ行く旅人。ここでは、北へ南へ朝廷の命のままに遙かな旅を続ける蘇軾自らをいう。杜甫「帰雁」詩（『杜詩詳注』巻二三）に、「東來千里の客、乱定まりて幾年にか帰らん」とある。英州での任期を終え、次の任に向かう時にはまたこの湯陰に立ち寄りたいたいものと述べている。瑞溪周鳳の説に、「凡ソ任ニ在（ル）ハ、三年ヲ以テ限ト為ス、則ンバ、我亦タ三年ヲ経ル、則ンバ自然ニ英州自リ来テ、復タ当ニ此ノ麦ノ新（シキ）ヲ嘗スベキゾ」とある。

朔北の大地は一面干からび赤茶けて、河沿いの地もただ黄色い土埃が舞うばかり。秋の長雨でさやの中の豆の実は入らず、夏の日照りで麦の実はやつれてしまった。

旅の宿りに、朝がゆが朝一番を告げ、旅中の膳に、めずらしい旬の味覚が手に入った。匙の中で青い豆が輝き、齒ざわりもやわらかだ。

逸品づくしのごちそうは、お役目を離れた役人には縁遠いもの、風に吹かれていたたく飯が、左遷された臣にはちようどよい。落ちぶれて彷徨い、いったいどこへ行くのやら、広漠としたこの世で浮き沈みしながら、しばし我が身を預けているだけだ。

（定州の人々は）「努めてお食事をとられますように」と口々に案じてくれているが、ほんに、かの人々の願いに違ふことなく、こうしてうまいものを食べている。万里の果てへ行く、この旅人、三年経って新たな任地に向かう際には、またここへ帰って来たいものだ。

（担当 原田直枝）